

マリアナ諸島テニアン島マルポ遺跡採集資料

Archaeological Collections from the Marupo site in Tinian, Mariana Is.

安里 嗣淳
ASATO Shijun

ABSTRACT: I found some archaeological artifacts from the surface of the Marupo site in Tinian island, Mariana Is in 2002. The site is located in a small valley near the Marupo natural spring in the south east part of the island.

The artifact consist three tridacna shell adzes, one stone adze, three sling stones and several rim fragments of the pottery. The shell adzes are made of the edge part of the Tridacna shell. The stone adze is more likely to be a gauge, bearing a body thicker than the blade width. The sling-stones are made of limestone, and are of the oval type with two pointed ends. All the pottery shards are the Mariana plain-ware type.

はじめに

2002年6月上旬にマリアナ諸島のテニアン島を訪れる機会があった。その際にいくつかの遺跡を踏査したが、マルポ遺跡でちょうど椰子の苗を植えるために耕耘機で耕作した直後の畑があり、そこでいくつかの遺物を採集したので報告しておきたい。

この遺跡は2001年にも帰りの空港へ向かう途中に訪れたが、かんたんに一瞥しただけでほとんど観察できなかった。今回は耕作によって雑草が除去され、しかも耕土が露出していたことから、表面には無数の貝殻や土器片、石片などが散らばっているのが観察できた。これらのなかから石斧、シャコガイ製貝斧、投弾、土器口縁部片サンプルを採集した。

マルポ遺跡はテニアン島の東南地域、空港の東側にある。島全体が比較的低平な石灰岩台地であるが、この一帯は東海岸に高いカロリナスの丘を望み、西側には空港のあるチューロの台地を控える小盆地である。この谷間の奥に島唯一の自然湧水があり、島の貴重な水源として戦前の日本統治時代から「マルポ井戸」と呼ばれて利用されてきた。遺跡はそのすぐ下方の赤土平坦地に形成されている。一帯は作物や雑草が繁っていて全域を踏査することはできなかったが、耕作土の露出した畑地だけでも長さ百mほどはあった。マルポ水源を拠点にした集落遺跡とみられる。

採集遺物

1. 石斧

2001年の訪問時に採集したものである。図4の2，図版1の10。刃先部分のみが残り、斧身部のほとんどを欠落している。刃の幅が斧の基部よりもせまいいわゆる狭刃形石斧である。断面形は楕円形で、その形を維持しながら刃部に向かって細くなる。刃縁は平面形がゆるい弧状をなし、側面観はおおむね相称形を呈する。刃の正面観は刃縁が片側に傾く弧状をなして、相称形を呈しない。これは相称形の刃部の片面に、さらに研磨をかけたことによって刃縁の正面観が直線ではなく弧状になったものである。この研磨面だけが特に円滑になっていて、使用痕とみられる無数の条痕がタテ方向（刃に対して直交方向）に残されている。全体的に敲打と研磨によって均整がとれ、円滑な面をもつ斧に

仕上げられている。製作時の打割痕や剥離痕は残されず、側面に敲打調整痕がわずかに認められる。使用痕から判断して、ヨコ斧（斧刃が斧の柄に対して直交）形と考えられる。

2. シャコガイ製貝斧

2002年6月に採集したもので、シャコガイの腹縁部の肋を斜め方向に切り取って斧としたものである。図3・4の1、図版2。図3の2点は肋部に対して45度ほど斜めに切り取り、全体的の平面形は三角形でいわゆる撥形をなす。三角の頂部には多少の相違があり、図3の2は頭部がゆるやかな丸味を帯び、図3の1は丸く尖っている。図4の1は一見短冊形に見えるが頭部を欠いており、長三角形の可能性もある。全体的には二枚貝腹縁部利用の特徴から、すべて平たい。いずれも外表面側には貝の波状模様が残され、内表面には肋の凹凸面がそのまま残されている。すなわち、表裏ともほとんど自然面のままで、加工はほとんど施していない。したがって、側面観は二枚貝のもつ自然のカーブがそのまま利用されて内側に傾き、ヨコ斧形の手斧を形成している。

加工は頭部、側面、刃部に施されている。頭部は丸くつくる。図3の2の貝斧は片側の側面がいわゆる定角式で、平たい面をつくり表裏との境界に稜線をもつ。しかしもう一方の側面は貝の縁端部にあたることからすでに薄くなっていて、定角をなさない。図4の1は両側面とも縁がしだいに薄くなり、定角を刃部付近にわずかに認められる程度である。刃部はすべて外表面側のみを加工した片刃である。刃縁は平面、正面とも直線形である。全体でも刃の幅が最大幅となっている。刃面における使用痕の観察は困難である。全体形が内側にカーブすること、外側にスロープをもつ片刃であることから判断して、ヨコ斧形の手斧と考えられる。

3. 投弾

サンゴ石灰岩またはサンゴ石を利用したものである。図5、図版3。図5の1・3は石灰岩、図5の2はサンゴ石である。全体としてアメリカンフットボールの形状をしているが、図5の1・2は断面が楕円形で平たい。図5の3は楕円形で丸い。いずれも先端が円錐形状に尖る。3個とも片方の先端が欠落しているが、これまでに知られている類例から本来は残存している反対側と同様に円錐形であったことは疑いない。

4. 土器

遺跡表面には無数の土器破片が散乱していたが、いくつかの口縁部片のみを採集した。図2、図版1の1～9。すべて小片であるため。全体器形は窺えない。器厚は全体的に13～20mmと厚いものが多く、6mm程度の薄手もある。胎土には粗い粒はあまり含まれないが、微砂粒や石英粒のようなものがみられる。しかし専門家による分析を経ていないので、まだ判明しない。器面は比較的よく撫で調整されていて、円滑である。口縁器形は次のような種類がある。

- ① 直口形 口縁からまっすぐ胴部に向かうものである。口唇部は平たくつくられるが、内外器面との境界は丸みを帯びている。
- ② 内湾形 内側に傾くもので、頸部から傾きながら口縁では上に向くものと、頸から口縁にかけて内側に傾き続けるものとがある。
- ③ 肥厚形 口縁が逆三角形に大きく肥厚するもので、装飾的な面よりも把手としての機能をもつ肥厚とみられる。

文様は施されていない。口唇部に細い曲線がみられるものがあるが、意匠文かどうか判別できない。

従来の類例からすると、これらの土器群はマリアナ無文土器の属するものと考えるが、未だマリアナ考古学の専門家の分析を経ていないので、確定的ではない。

結び

マルボ遺跡はテニアン島で従来知られている先史遺跡のなかでは比較的内陸部の遺跡に属するが、それはおそらく島の唯一の水源マルボ湧水に依存したことによるものであろう。シャコガイ製貝斧、投弾の存在は他のマリアナ諸島の多くの遺跡に類似する。この遺跡の年代的、時期的位置づけについては私は所論を述べる力をもたない。

沖縄の南琉球先史文化との比較で検討すると、まず狭刃石斧が注目される。狭刃石斧は南琉球先史時代の特徴的な石斧のひとつである。厳密にはマルボ遺跡のそれは厚い楕円形で、南琉球は少し平たいという相違はあるが、胴部よりも刃の幅が狭いという特徴は共通する。これは北琉球にはあまり見られない現象で、南方系といわれている南琉球の石器文化の様相や文化圏を検討する上で貴重であり、今後東南アジアからオセアニアにかけての類例を集成して、どのようなことが見えてくるのか是非追跡していきたい石器文化のひとつである。

シャコガイ製貝斧は腹縁部利用型が突出するミクロネシアの貝斧文化の様相をよく表している。この型は同じく貝斧文化をその特徴のひとつとする南琉球においては一個も発見されていない。南琉球の貝斧文化がミクロネシアとは直接的関係を有しない証拠ともいえる。ただし、私は貝斧文化は東南アジア島嶼地域で発生し、その後東のミクロネシア・メラネシアへの道と、北の琉球への道とに分かれて広がっていったと考えているので、このマルボ遺跡の貝斧文化も、南琉球の貝斧文化とは、その源流を東南アジアに求めるという点においては共通する。

投弾もミクロネシア先史文化遺跡からよく出土しているが、沖縄では未だ明確な投弾は出土していない。このことも、貝斧の型の相違と同様に、彼我に直接的関連がないことの証拠になり得る。しかし、投弾は広く分布する石器文化であり、沖縄においても存在した可能性はあるので、注意はしていくべきであろう。

土器は文様がないことからマリアナ無文土器であろうとしたが、当該土器の観察に慣れていないので、いずれ専門家の分析を経て、それをもとに時期についても検討したい。

なお、マルボ遺跡で採集した資料は基本的にはテニアン市の文化財展示室に返還（寄贈）することとしたい。ただ、当地の資料室は無人の「倉庫」のような施設であり、適切な保管と自由な利用があまり期待できない。同市と協議の上、場合によってはサイパンの北マリアナ国博物館に提出することになるかも知れない。

小文に紹介した資料の実測は上原園子・大城聖子、トレースは外間瞳、写真撮影は光嶋香・宮崎典子の各氏があたり、レイアウトは比嘉優子があたった。記して感謝の意を表すものである。

（あさと しじゅん：所長）

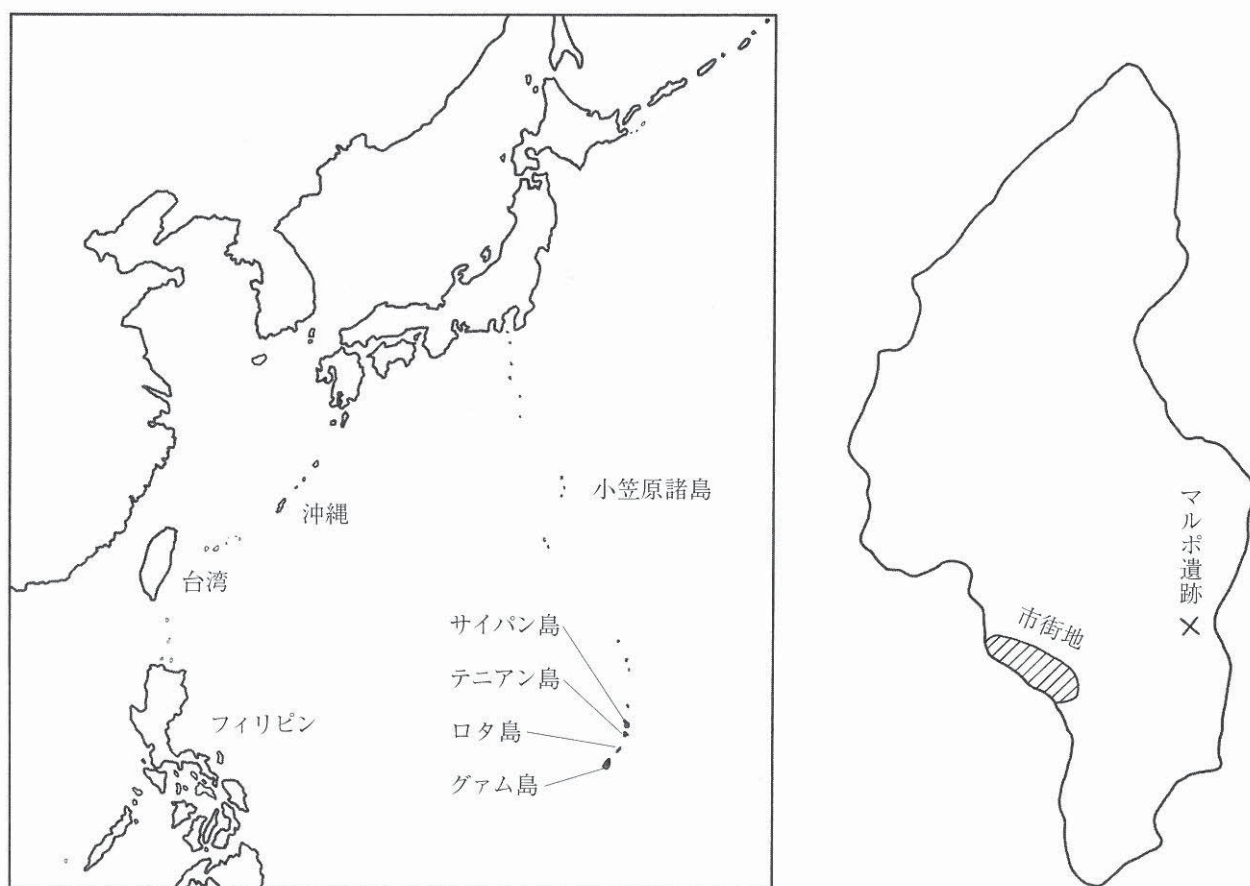


図1 テニアン島 マルポ遺跡の位置 Location of the Marupo Site.

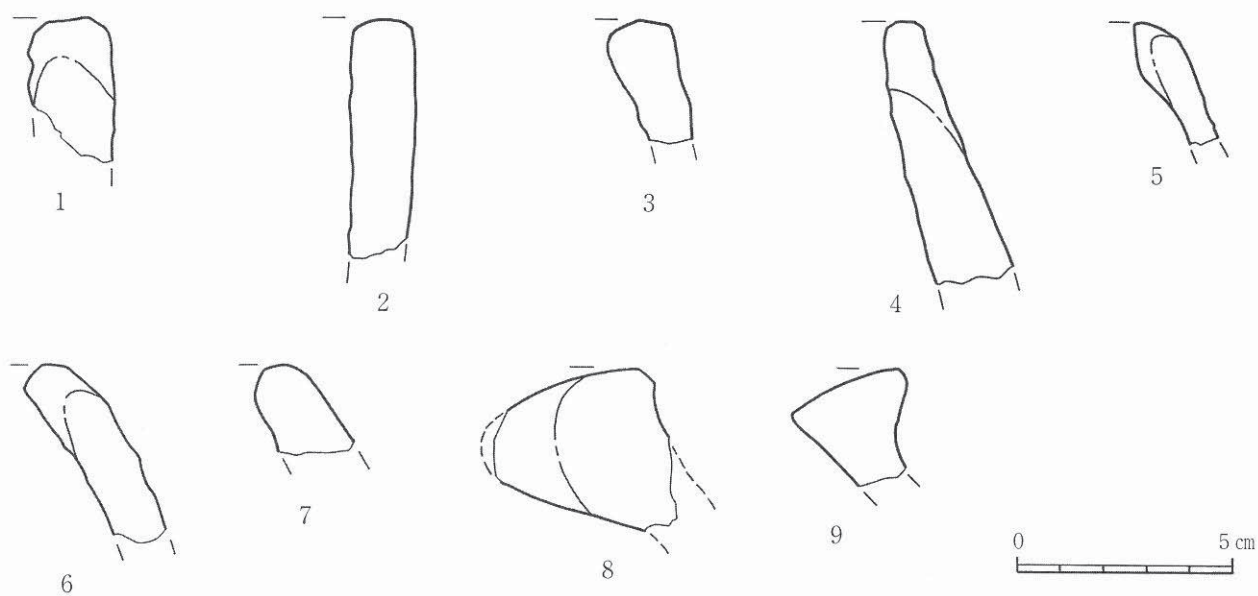


図2 土器口縁部片 Pottery shards

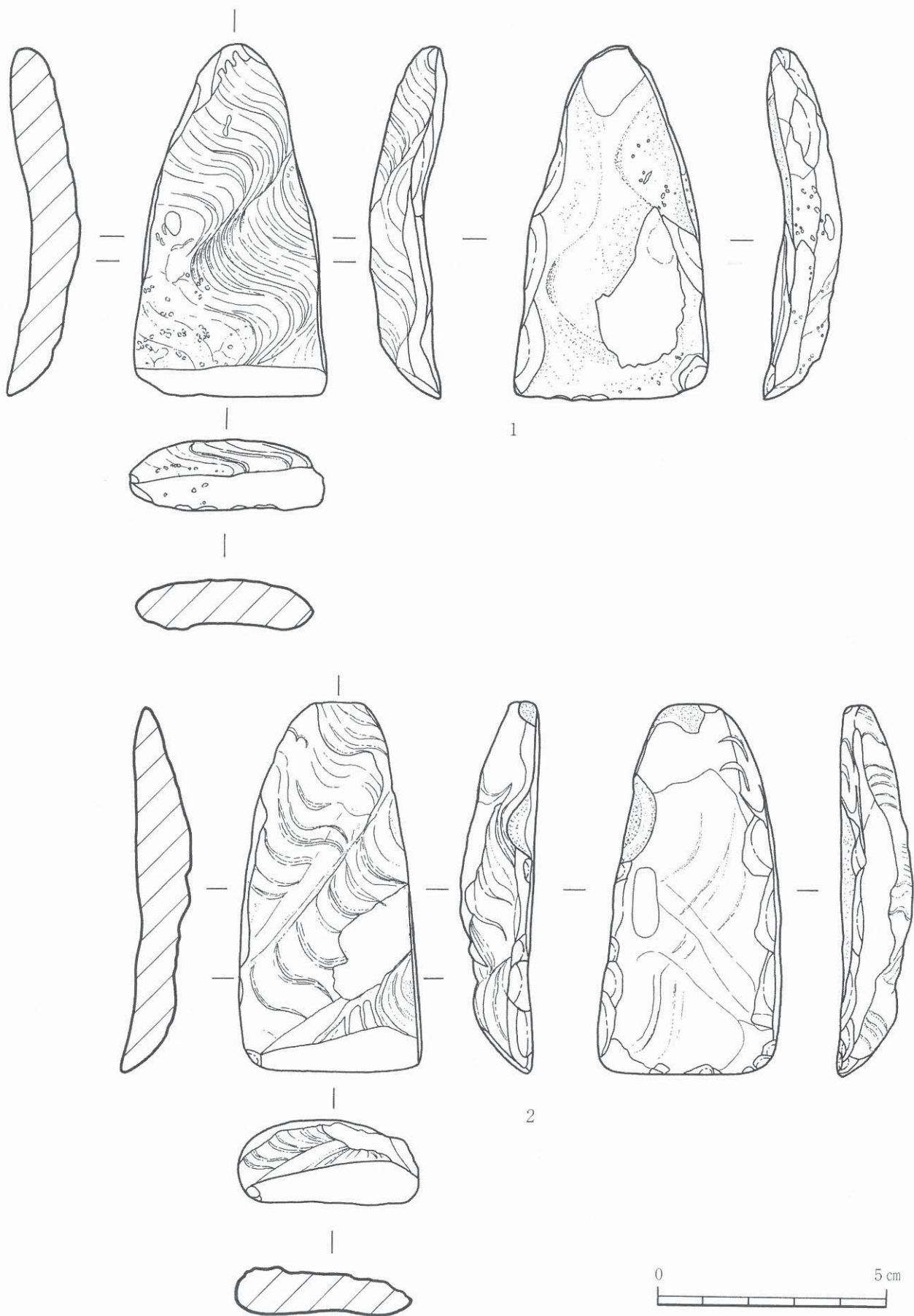


図3 シャコガイ製貝斧 Tridacna shell adzes

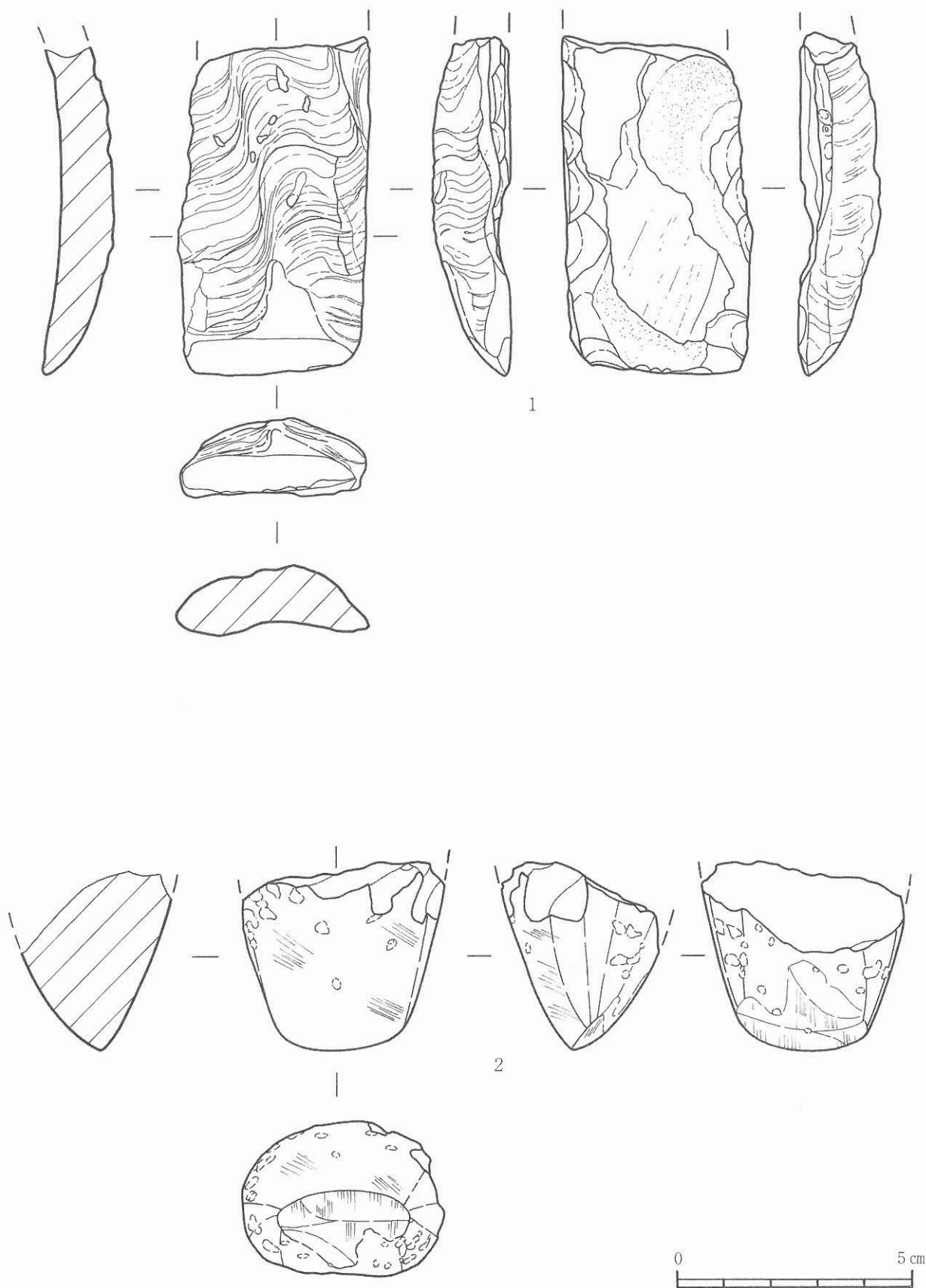


図4 シャコガイ製貝斧・石斧 1:Tridacna shell adze 2:Stone adze

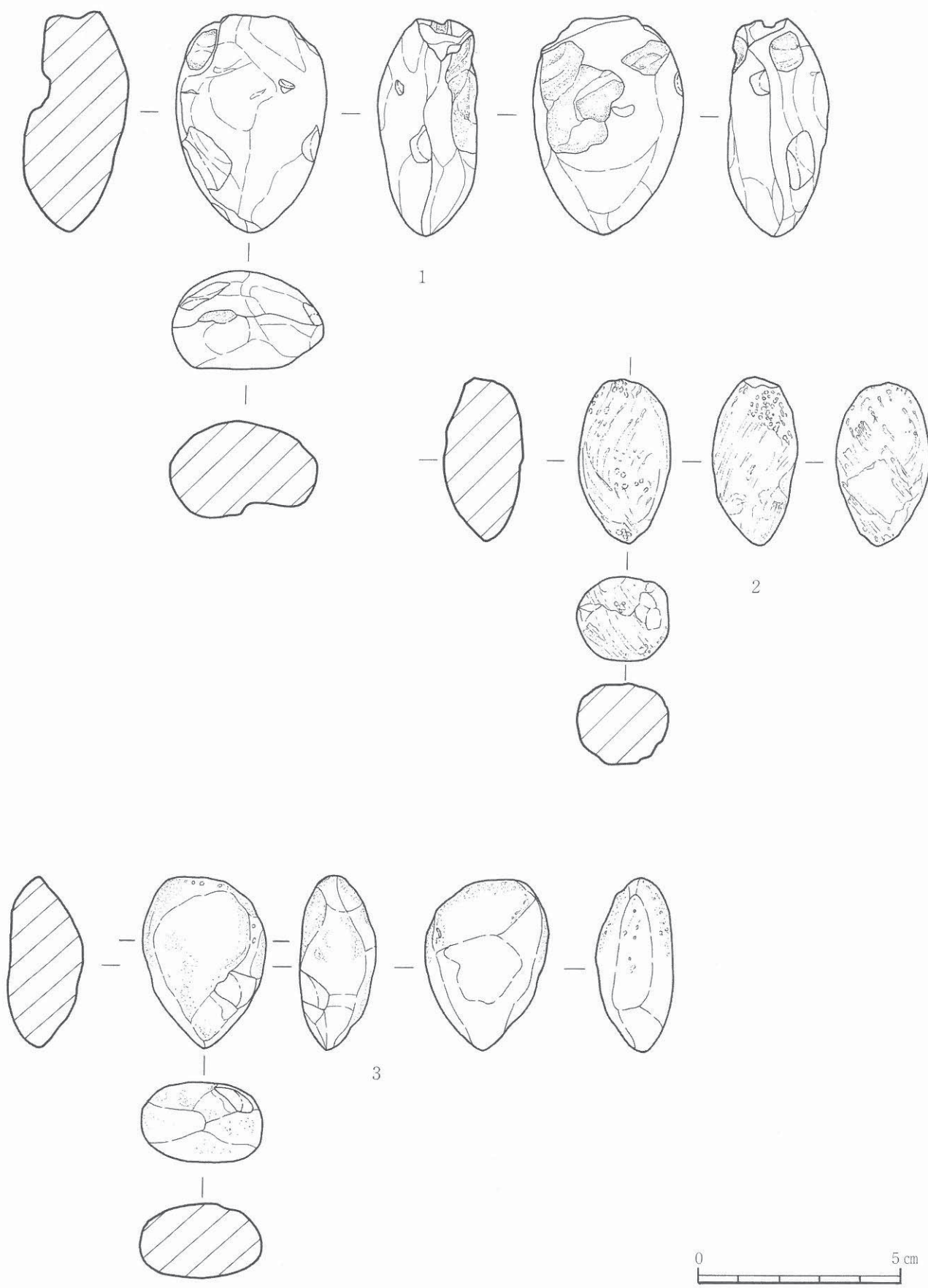


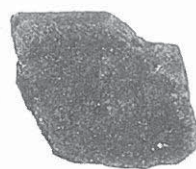
图 5 投弹 Slingstones



1



2



3



4



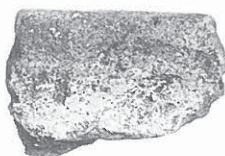
5



6



7



8



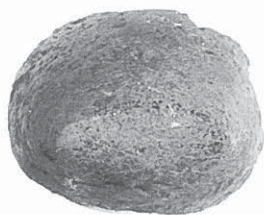
9



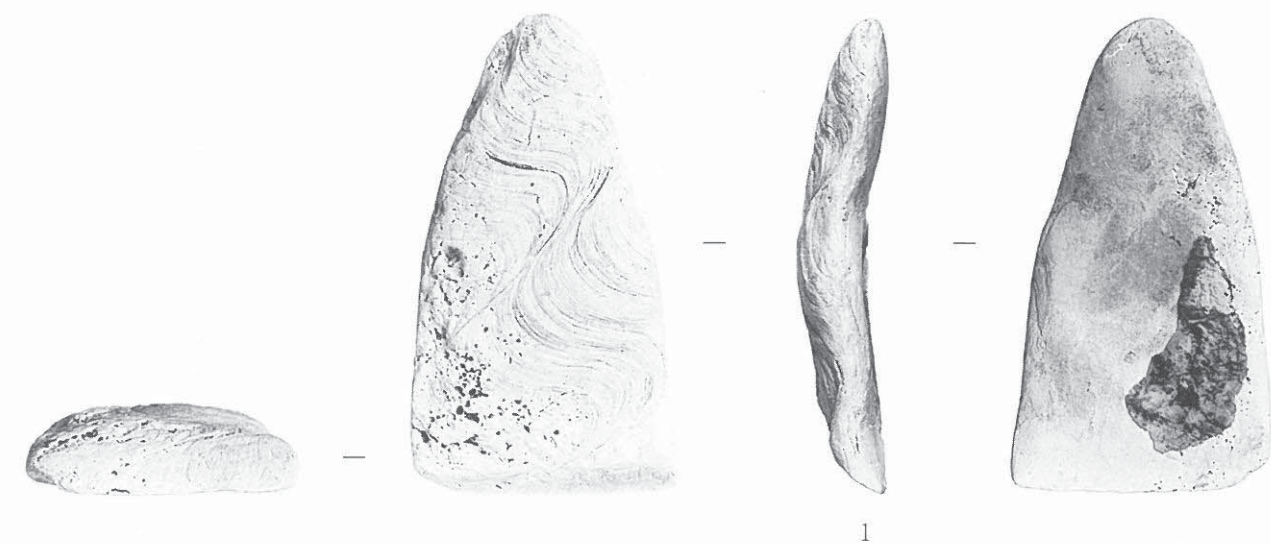
10



10



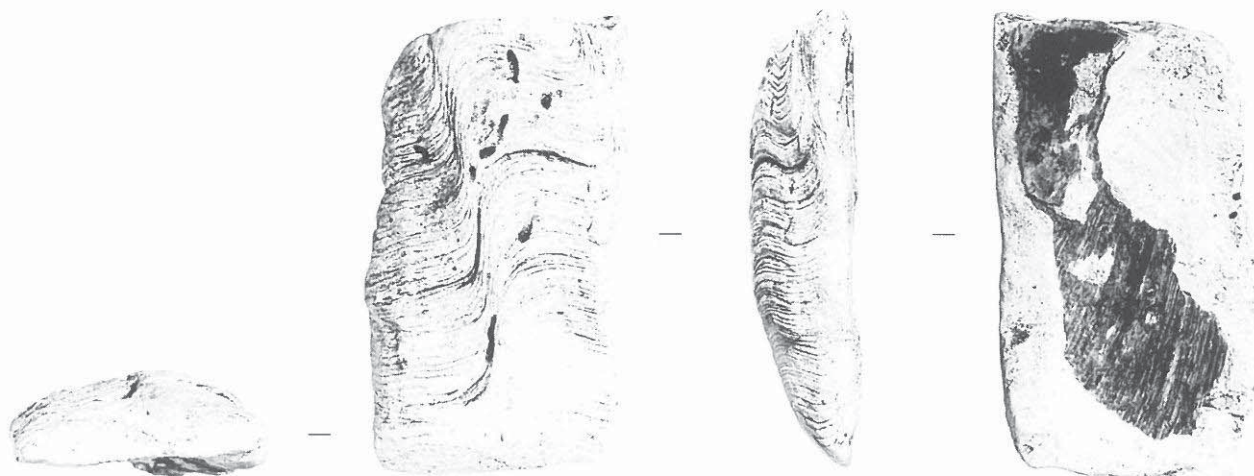
図版1 土器口縁部片 Potteny shards (1~9)
石斧 Stone adze (10)



1

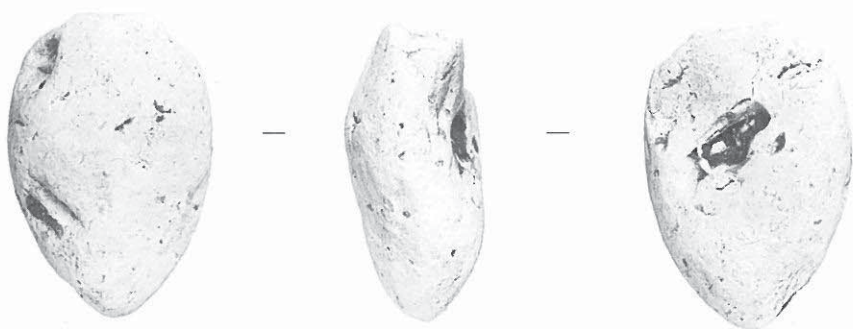


2



3

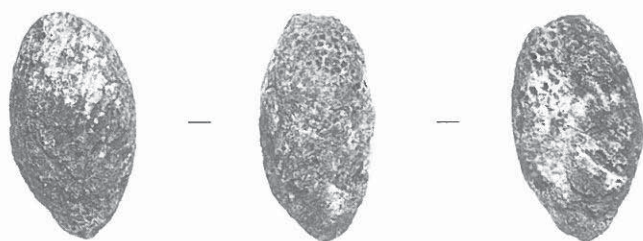
図版2 シャコガイ製貝斧 Tridacna shell adzes



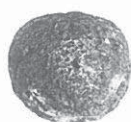
|



1



|



2



|



3

图版 3 投弹 Slingstones